

国内経済情勢

概観

鉱工業生産の増勢は鈍化を示しているものの、なお基調的变化は見受けられない。最近における企業の業況予測や設備投資計画にはなお根強い態度がうかがわれる。こうした空気は最近の商品市況にもある程度反映しているようであり、鉄鋼、繊維、石油などは地合い依然軟弱ながら、一部に下げ一服ないしあや戻し商状がみられる。銀行貸出は引き続き抑制されており、最近における決算要資の増高から企業の手元資金も漸次取りくずされつつあるものとみられる。

この間国際収支は、貿易、貿易外ともかなりの赤字となったため、逆調を続けているが、貿易収支の実勢は、輸出の好調を主因に好転をみつつある。ただ、輸入の先行きについては上記の産業界の態度にかんがみても、なお注目を要する。

生産は増勢鈍化のうちにもなお根強い動き

5月の鉱工業生産(季節調整済み)は+0.9%(速報)と前月に引き続き微増となった。資本財や耐久消費財の一部では生産減少がみられたが、資本財のなかでも受注機械部門では引き続きかなりの伸びがみられ、また生産財においても、合織、非鉄、化学が増加するなど、なお根強い動きが見受けられる。

鉱工業出荷は、5月中+1.3%と引き続き増加した。これは、生産財の出荷が流通部門における在庫調整の一巡から鉄鋼、石油を中心にかなりの増加を示したほか、耐久消費財や建設資材の出荷が前月著減の反動から増加したためである。

メーカー製品在庫量は5月中+1.1%と前月に引き続き増加した。これは、生産財と輸送機械(自動車)の在庫増を主因としているが、生産財では鉄鋼在庫が、流通段階における在庫調整の一巡かたがた輸出の好調を背景に、徐々に減少したことが目立った。

ここ数か月の動向をならしてみると、昨年後半来著しい増加を続けてきた最終需要財(とくに輸送機械を除く資本財)在庫の増勢は更年後さすがに頭打ち傾向に転じている反面、昨年を通じ一貫して減少をみてきた生産財在庫が需要の伸び悩みを主因に増加している、といった大勢にはあまり変わりはない。

最近の設備投資は、投資財出荷や機械販売額などの動向からみると、ゆるやかな増勢をたどっているものと思われる。主要企業の短期観測によっても、製造業の上期設備投資の実勢は漸増が見込まれている。

一方、機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)は、ここ数か月来微減傾向を示してきたが、4月には増加した。これは鉄鋼よりの受注増加もあるが、主として電力、農林漁業など非製造業からの受注集中によるもので、製造業の受注がここへきてとくに盛り上ったとはみられない。

商品市況は総じて地合い軟弱ながらやや落ち着き商状

最近の商品市況をみると、総じていくぶん落ち着き気配がうかがわれる。すなわち、従来市況軟化の著しかった鉄鋼、繊維、石油などでは、ひところのような先安人氣がやや後退して、一部に下げ一服ないしあや戻し場面がみられた。なお、非鉄、化学、紙・パルプなどでは、ここへきてさすがに騰勢鈍化の傾向がみられるものの、引き続き

地合いは堅調を呈している。このような商品市況の動きには、流通段階を中心とする在庫調整の進展、ならびに繊維における季節需要の伸長、鉄鋼、石油の市況対策の推進なども反映している。

また、とくに最近では、輸出の好調が内需の減退をカバーして市況のいっそうの軟化を下ささえ、当面の市場人気にやや明るさをもたらしていることも見のがしえない。

この間、5月の本行卸売物価は、月前半における木材、繊維、セメントの軟化を主因に -0.3% と続落したが、下旬では上述のような商品市況の落ち着きを映じて工業製品がおおむね横ばいとなったため、総平均も保合いとなった。

一方消費者物価(東京)は、5月中 $+0.2\%$ と引き続き上昇した。これは主として食料品、サービス料金の値上がりによるものである。

決算資金需要の増高もあり、市中金融は漸次窮屈化

5月の金融市場をみると、財政資金の引揚げならびに本行の債券売戻しなどもあり、総じて繁忙を呈した。このため、本行貸出は月中757億円の増加をみ、コール市場も通月繁忙裡に推移し、レートも堅調を呈した。

決算関係の資金需要は、前年をかなり上回った模様であるが、全国銀行貸出は、5月中1,729億円増と、前年同月を 13% 下回った。これは、銀行が取引先選別強化など貸出抑制を続けたうえ、月末休日の関係から、法人税納付や月末期限手形の決済が6月初にずれただため、この関係の貸出実行を繰り延べて月中増加額の圧縮に努めたことによるものと思われる。上記事情から、企業の手元資金も漸次取りくずされつつあるとみられるが、総じて企業の資金繰りがここへきて著しくひっ迫したとは見受けられない。

この間、本年初来増勢をたどってきた企業倒産は、最近かなり落ち着きを呈している。5月中の倒産件数、金額はともに前月を相当下回り、6月に

はいつてからも、5月とほぼ同様の状態が続いている。

貿易収支の実勢はかなり好転、総合収支は引き続き逆調

5月の外国為替収支は、貿易収支が引き続きかなりの赤字を示し、貿易外収支も特許料の支払増などから赤字幅を拡大したうえ、長短資本の黒字が小幅にとどまったため、総合では45百万ドルの大幅逆調となった。

5月の輸出は、為替ベースで前年同月比 $+15\%$ と好調を続けた。先行指標でも、信用状では前年同月比 $+20\%$ 、認証でも $+14\%$ とそれぞれ順調に伸びている。機械類、化学製品の一部、合繊などが引き続き伸長しているほか、海外の好況と内需の伸び悩みを背景に、鉄鋼の好転が目立っている。

5月の輸入は、為替ベースで前年同月比 $+21\%$ と高水準を続けたが、1~3月(前年同期比 $+34\%$)に比べると鈍化している。商品別の動き(通関、季節調整済み)をみると、食料品、雑製品(鉄鉄、非鉄地金を含む)は依然増勢をたどっているが、原材料、化学製品などは横ばいないし若干の減勢を示している。

こうした原材料輸入の動向は、原料消費の増勢が原油などを中心に年初来頭打ちになったうえ、本年1~3月に小幅ながら行なわれた在庫投資が、4、5月にはほぼ一服したこと、ないしは木材などである程度在庫圧縮が行なわれたことなどによるものと思われる。

もっとも、輸入原材料在庫率が低く、在庫食いつぶしの余地は乏しいとみられるうえに、国内の生産活動が依然根強いことなどからみて、輸入の先行きについてはなお注目を要する。先行指標、とくに輸入承認面ではこうした状況を映じてすでに下げ止まりの傾向がうかがわれる。すなわち、5月の輸入承認は大口機械の輸入による一時的増加を割引いても、3、4月の水準よりやや高目となっている。